

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02123

研究課題名(和文)ニコラウス・ペヴスナー、その知られざる実像 精神の深みからの社会改良

研究課題名(英文)Sir Nikolaus Pevsner: A Social Reformer

研究代表者

近藤 存志 (Kondo, Ariyuki)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00323288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、建築史・美術史・デザイン史家ニコラウス・ペヴスナーの社会改良を目的とした執筆、社会活動に焦点を当て、これまで注目されてこなかった社会改良家としての芸術史家の実像に迫ろうとするものであった。同時代の一般市民の芸術的素養の育成と産業デザインの質的向上を具体的な目標に定め、芸術・デザイン関連の雑誌の編集、一般読者向け記事の執筆、ラジオ講演等を通して、広くデザインに関する国民的関心を啓発し、一般市民の日常生活の向上と美的素養の育成に芸術文化史的側面から貢献しようとしたペヴスナーの多彩な活動は、彼の社会改良への情熱を常に重要な原動力としていた。

研究成果の概要(英文)：Sir Nikolaus Pevsner is known today as an art historian with a vast number of publications, and the subjects of those publications reflect the wide range of his interest in artistic creativity. Admiring the monumental achievements of this scholar, one cannot but ask what drove Pevsner to explore art in such a wide and varied way. The answer seems to lie in his role as a social reformer who aimed to improve the standard of living of the general public through art-historical education, for instance, by presenting modern design as 'the only adequate expression' of the mode of life in mid-twentieth century Britain. Rather than concentrating on art history as an academic subject in British higher education, Pevsner chose to emphasize the importance of developing the aesthetic faculties of the general public and, by so doing, end the monopoly of the elite in art, design and architecture.

研究分野：イギリス芸術文化史・デザイン史

キーワード：イギリス芸術文化史 社会改良 デザイン史 ニコラウス・ペヴスナー

1. 研究開始当初の背景

ニコラウス・ペヴスナー (Nikolaus Pevsner, 1902-83) は、文化科学的な関心による建築史・美術史・デザイン史研究から、歴史編纂・データ収集、芸術諸作品や芸術思潮に国民性や地域性を読み取る試み、そして一連のモダン・デザインに関する研究まで、きわめて広範な主題を、多彩な研究視点とアプローチによって研究した。しかしペヴスナーの研究手法は 1970 年代末以降、激しい批判にさらされることになった。D・ワトキン (David Watkin, 1941-) や T・モウル (Timothy Mowl, 1951-) 等が発表した一連のペヴスナー批判は、ペヴスナーの芸術文化史学が時代精神や機能主義、産業・建設技術の進歩などを芸術様式の決定因として強調したことによって、芸術家の独創性や想像力、才能を著しく軽視し、芸術家個人の役割に時代の「無意識的合意」を表現する単なる媒体としての価値しか見出していないと非難した。晩年、長く療養生活を送ったペヴスナーは自らこうした批判に反論することはできなかった。近年、ペヴスナーの学問的功績の再評価を試みるシンポジウムが開催されたこともあったが、ペヴスナーの芸術文化史研究に関する建築史、美術史、デザイン史の各分野での一般的評価は、1970 年代末以降の批判的評価を今なお色濃く引き摺っている。しかしそうした一連の批判は、十分に当をえたものだったのだろうか。本研究はこうした問いかけに関する考察からはじまった。

2. 研究の目的

本研究は、20 世紀を代表する建築史・美術史・デザイン史研究者ニコラウス・ペヴスナーの、これまで注目されることのなかった社会改良家としての側面に注目し、その知られざる実像に迫ることを目的とした。ペヴスナーの芸術文化史研究は、芸術家個人の才能や創造性よりも、時代精神や工業技術の進歩などの外的事象の影響を過剰に強調したとしてしばしば批判的に論じられてきたが、そうした傾向はペヴスナーの芸術文化史学の研究が社会改良的意志と理想に強く牽引されたものであり、彼の芸術文化史家としての歴史研究と執筆活動がピューズンやラスキン、モリス、グロピウスといった先人たちの芸術的活動に通じる能動的な性格を強く帯びていたにもかかわらず、その特徴がこれまで十分に理解されてこなかった事実に起因していると思われる。そこで本研究は、ペヴスナーの芸術文化史学の重要な核心部分でありながらこれまで注目されなかった、社会改良家としてのペヴスナーの実像に光を当てることで、1970 年代末以降、いわば無批判に受け入れられてきたペヴスナーの研究手法と業績に対する否定的評価への反証を試みることにした。

ペヴスナーの芸術文化史研究に向けられた一連の批判は、芸術史研究を通して第 2 次

世界大戦後の西欧社会の発展と改良に関わり続けた一人の社会改良家としてのペヴスナーの学際的活動と情熱に着目してこなかった。そこで本研究では、ペヴスナーが社会や時代の諸課題の改善や解決に芸術創造活動が果たし得る役割があると確信していたことを確認し、有名無名の建築物から、絵画、庭園、家具デザイン、グラフィックデザインに至るまで、多岐に及ぶ人間の芸術的・日常的創造行為の所産に幅広く研究の関心を見出したペヴスナーの諸活動に彼の芸術研究・教育を通じた社会改良に対する意思を読み解くことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、1) ペヴスナー批判の系譜とその反証の試み、2) ペヴスナーによる中世的精神の近・現代的意義の強調と日用の美をめぐる芸術文化史的考察、3) 第 2 次世界大戦後のイギリス・デザイン産業への提言とペヴスナーの社会改良的精神、4) ペヴスナーの福音主義的キリスト教観と社会改良家としてのモダン・デザインの提唱、の 4 点に注目しつつ、特に「ペヴスナーの中世的精神の近・現代的意義に関する主張」と「ペヴスナーによる第二次世界大戦後のイギリスのデザイン界・デザイン産業への社会改良的提言」に関する考察に力点を置いて研究成果の発表に努めた。

4. 研究成果

1) 社会改良家としてのペヴスナー

1967 年にニコラウス・ペヴスナーがイギリス王立建築家協会のゴールドメダルを受賞した際、建築史家ジョン・サマーソン卿は『アーキテツ・ジャーナル』誌 (*The Architects' Journal*) に寄せた論評の中で、建築界にペヴスナーが果たした役割を「ペヴスナーの 2 つの顔」と表現して、主に 2 つの観点から称賛した。一つ目は特定の国や地域に限定されない国際的な広がりを持つ研究テーマと積極的に取り組む美術・建築・デザイン史家としてのペヴスナーの働きであり、二つ目はイングランド建築の歴史に対する広範な美術・建築史的関心を興隆させることに大きく貢献したイギリス芸術文化史家としての側面であった。

しかし、この時サマーソンが言及しなかった第三の「顔」がペヴスナーにはあった。同時代の一般大衆の芸術的素養の養成と産業デザインの質の向上を具体的な目標に定め、一般読者向け記事の執筆やラジオ講演等を通してデザインに関する国民的関心を啓発しようとした「社会改良家」としてのペヴスナーである。

ペヴスナーは、バロック建築からドイツ表現主義絵画、マニエリスムの芸術からイギリスのピクチャレスク趣味、ゴシック・リヴァイヴァル建築からモダン・デザイン、さらには一般大衆の日用的必要に応えるための大

量生産品に至るまで、幅広く芸術文化研究の対象としたが、このことは現代における芸術趣味の向上を目指すことで芸術の愉しみを一部の知的特権階級の手から解放し、延いては社会改良に果たし得る芸術の役割の拡充を模索しようとした彼の意思によるところが大きかった。

2) 中世の理想化とペヴスナーのキリスト教信仰

ペヴスナーの社会改良的関心は、彼自身の関心テーマが青年期に中世における芸術的営みに向けられていたことと決して無関係ではなかった。それは丁度、ロシア系ユダヤ人としてドイツ・ライプツヒに生まれたペヴスナーが、キリスト教会に身近に接することになった時期と一致する。

ペヴスナーは大学進学を前にルター派の牧師テオドール・クルマッハー (Theodor Krummacher, 1867-1945) の下でキリスト教について学び、1921年に洗礼を受け、ユダヤ教徒からキリスト教徒 (ルター派) に改宗した。ペヴスナーの改宗は、これまでしばしばドイツ人としての自覚を強めていた青年ペヴスナーの世俗的判断に基づく行動と解釈されてきた¹。しかしペヴスナーが当時書きまとめていたノート (現在、米国ゲッティ研究所付属図書館所蔵) には、彼が新約聖書について詳細に学んでいたことを示す記述が含まれており、改宗に向けた彼の真剣な準備の軌跡を見て取ることができる。ペヴスナーは、1954年にペヴスナー家の家族史についての文書を記した際にも、その中で自らの改宗について「十分に真剣」な性格のものであったと振り返っている。

大学在学中およびドレスデンに在住していた時期、さらにはイギリスに研究と生活の拠点を移してから、ペヴスナーにとってキリスト教信仰と人間の芸術的創造行為の結びつきは、主要な関心テーマの一つであった。このことは、マニエリスム美術を抵抗宗教改革の過程でローマ・カトリック教会の中に興った中世回帰的諸傾向の芸術的表出としてとらえた1925年発表の論文「抵抗宗教改革とマニエリスム」(「>>Gegenreformation und Manierismus<<」) や、中世キリスト教信仰を優れた芸術創造の決定的原因として強調してみせた1945年出版の『サウスウェル大聖堂の葉飾り』(The Leaves of Southwell) などから読み取ることができよう。

ペヴスナーは、彼自身のキリスト教信仰について明確に語った文章を残すことはしなかったが、前出の論文と著作に加え、1930年代から1940年代初頭に彼が著した論文や著書たとえば、1934年5月にナチス系学術誌『塔守』(Der Türmer) に掲載された論文「芸術と国家」(「>>Kunst und Staat<<」) 1933年末から1934年にかけて執筆されたと考えられている未発表論文「今日の芸術と未来の芸術」(「>>Kunst der Gegenwart und Kunst

der Zukunft: Zehn Abschnitte von -----<<」) ペヴスナーの代表的著作として知られる1936年刊行の『モダン・ムーブメントのパイオニアたち ウィリアム・モリスからワルター・グロピウスまで』(Pioneers of the Modern Movement: From William Morris to Walter Gropius) 1942年に初版が出版された『ヨーロッパ建築史概説』(An Outline of European Architecture) などには、理想的社会のあり様として「中世」の価値を強調し、真のキリスト教精神は中世ヨーロッパにあり、そうした精神が優れた芸術を生み出していたと考えた青年ペヴスナーのキリスト教観が表明されている。

3) ペヴスナーの中世的精神の近・現代的意義に関する主張

1930年代から1940年代にかけて、ペヴスナーは中世の諸芸術に言及する際、決まって中世の芸術家にとっては人間と神との間の上下・垂直の関係性が重大な意味を有していたこと、芸術家(具体的には無名の石工や棟梁たち)は究極的な関心、すなわち信仰表現の一環として遠大な目的 神への献身 のために働くことを芸術創造行為の一義的な目的としていたこと、そして芸術はそうした目的を表現する役割 神を讃える 機能(表現的な力) を有するがゆえに制作されていたこと、を繰り返し強調したことは注目に値する。たとえば『ヨーロッパ建築史概説』の中でペヴスナーは、「中世の建物もすべて誰かによって設計されたのである。しかし中世初期の世紀には、これらの作者の名前は、彼らの作品が不朽不滅と思われた一方で、重視されることがなかったのである。彼らは、自分たちの名声を獲得するよりも遠大な目的のために働く職人であることに満足していた……」²、「13世紀には、司教も修道僧も、そして騎士も職人も、それぞれの能力に応じて、現世に存在する事物で神によって創造されなかったものは無く、すべての事物に関する感覚や興味もその事物の有する神を讃える価値に由来すると確信していた。」³と記している。

はたして中世の芸術創造行為が本当に信仰表現的役割を担って営まれていたのか、そして中世の芸術家たちは本当に「自分たちの名声を獲得するよりも遠大な目的のために働く職人であることに満足していた」のか

こうした点を詳細に吟味することにペヴスナーは関心がなかった。彼の中世社会における芸術創造行為の実態に関する記述は、実際のところ厳密なものではない。むしろペヴスナーは、中世社会においてはキリスト教信仰が芸術創造の世界をあまねく支配していたと、ある意味独断的に信じ、そうした 神律的社会 (神との関係において人があらゆる行いに熱心に取り組んだ社会) における芸術創造の営みに、20世紀芸術の規範となる芸術創造のモチーフを見出したいと願って

いたようである。

前出の論文「芸術と国家」の中でペヴスナーは、中世では芸術創造は人間の名声や政治的権力への従属などといった世俗的な欲求や要求とは乖離した 崇高な行為 として営まれていたのに対して、20 世紀前半のデザインはもはや 崇高な行為 としての価値を失い、極端な個人主義に陥っている、と主張した。ペヴスナーは、彼自身が尊敬していたグロピウスが、その芸術創造活動の目標を「人の生活に徹底して奉仕する空間の実現」に見出していたことに非常に励まされ、建築をはじめとする総てのデザイン行為が 20 世紀においても、建築家やデザイナーの名声実現の手段としてではなく、より崇高な目的のために営まれる行為となることを強く期待した⁴。そしてそうした期待を実現させるうえで、中世の芸術創造行為を範とし、「中世的精神の近・現代的意義」を提唱することに強い使命感を抱いていたのである。

4) ペヴスナーによる第二次世界大戦後の英国デザイン界・デザイン産業への社会改良的提言

(1) ペヴスナー、「家」を語る

ペヴスナーは 1959 年 7 月、『アーキテクチュラル・リビュー』誌 (*The Architectural Review*) に「ローハンプトン ロンドン県カウンシル・ハウジングとピクチャレスクの伝統」(‘Roehampton: LCC Housing and the Picturesque Tradition’) と題した建築批評記事を執筆し、当時ヨーロッパ最大級の公営住宅建設事業であったローハンプトン・アルトン公営団地 (Alton Estate, Roehampton) を「優れたコンセプトと卓越した建設技術」の産物として高く評価した⁵。この記事でペヴスナーが目にしたのは、多様な市民のニーズに応える大小様々なタイプの住棟が、広大で緑豊かな敷地に配されたこの事業の都市計画的側面であった。

ところがやがてこの大規模公営住宅団地が荒廃しはじめると、ペヴスナーは 20 世紀中頃のイギリスの住宅供給問題に「安価・安直な解決策」によって応えようとした頑固な機能主義者・モダニズム主義者として批判されることになった。そうした批判によってペヴスナーは、低所得世帯の生活に十分に配慮しない冷酷なモダニズム主義者というレッテルを貼られてしまった。

しかし実際のところ、ペヴスナーは 20 世紀中頃の一般大衆の生活環境の美的質の向上を切迫した芸術的課題として捉えていた。ペヴスナーが 1965 年に発表した論稿「調度・造作の哲学」(‘Philosophy of Furnishing’) は、彼が一般大衆の日常生活空間を快適にするためには何が求められているか、という問題を扱ったものであった⁶。この中で一般大衆が生活する室内空間の快適さ、さらには住文化そのものが 20 世紀になって壊滅的な状態に陥ったこと、個々の住戸があまりに狭く、

最低限の文化的生活の営みすら保証されていないことを指摘している。そのうえでペヴスナーは住文化の拡充の必要性を唱え、特に一般大衆の居住空間の質的向上と「住まい方」の変革が 20 世紀社会の中心的課題としてみなされるべきであると主張した。この問題は、モダン・デザインの擁護者であり、機能主義者であったペヴスナーにとって、生涯重大な関心であり続けた。

(2) 編集者ペヴスナーと社会改良

ペヴスナーによる第二次世界大戦後のイギリスのデザイン界・デザイン産業への社会改良的提言は、建築雑誌の編集の仕事を通して実践された。

1936 年以来、『アーキテクチュラル・リビュー』誌に度々記事を執筆していたペヴスナーは、1941 年冬、同誌に編集責任者として迎えられた。ペヴスナーの編集方針の下で、『アーキテクチュラル・リビュー』誌は一般大衆の日常生活と密接に関係する建築物やデザインに焦点を当てた記事を掲載することになった。加えてペヴスナーは「デザイン批評」(‘Design Review’) と名づけられた特集を毎月組んで、日用品や大量生産されるモダン・デザイン製品の視覚的愉しみについて広く啓発する試みを展開した。ペヴスナーが雑誌編集の仕事を通して達成しようとしたことは、20 世紀中頃のイギリスにおいて未だ美的対象として見做されていなかった日用の建築物や製品の芸術的価値を論じることで、社会を構成する圧倒的多数派である一般大衆の日常生活の美的質の向上に芸術が果たし得る役割に、同時代人の目を向けさせることであった。

(3) 労働者に向けて語られたペヴスナーの言葉

社会改良家としてのペヴスナーの働きは、しばしば多様な活字媒体での積極的な執筆活動を通して行われた。たとえば、1946 年、ペヴスナーは労働者教育協会 (Workers’ Educational Association, 1903 年発足) の機関誌 (*The Highway*) に短い論評「産業デザインについて考えること」(‘Thoughts on Industrial Design’) を寄稿し、第二次世界大戦直後のイギリス社会の事情を念頭に、一般大衆がデザインに関心を持つことの必要を説いた⁷。

ペヴスナーは「優れたデザイン製品が社会に流通する」ために重要な役割を果たす存在を、製造業者と、その下で実際に製品を製作する製造従事者、仲買人 (業者)、店頭販売人、そして消費者に大きく分類し、「安価でデザイン性に優れた大量生産品の流通」にそれぞれの立場が果たす役割をあえて簡略化して説明し、そのうえで仲買人 (業者) や店頭販売人の「経済効率に基づく判断」が、一般消費者に「デザイン性の良し悪し」を判断する機会さえ十分に与えていない「現状」を痛

烈に批判した。そしてこうした現状の要因を、仲買人（業者）や店頭販売人たちが持っている優れたデザイン製品に関する固定観念に見出した。優れたデザイン製品とは、仲買人（業者）や店頭販売人たちにとっては、一般に手の込んだ装飾的要素を備えた高価なものを意味し、そうした製品の購入を予算的な制約を持つ一般消費者に勧めることは無意味である、という暗黙の了解のようなものが彼らの中に強く働いて、結果的に良質なデザイン性を備えた製品は一般大衆の目に触れることが極端に少なくなっていた、と分析した。ペヴスナーにとっては、こうした消費文化の固定観念こそが批判されるべきものであった。彼によれば「今日（20世紀中葉）の様式」は、「装飾を拒絶」し、「モダン・ムーブメント」と称される「装飾を排した、簡潔で、すがすがしい形状」によって「過去のいかなる時代よりも優れたデザインを生み出し得る可能性」を豊かに内包していた。つまりペヴスナーによれば、「モダン・デザインの時代」こそ、「安価でデザイン性に優れた産業デザインの存在」に社会の目を向けさせ、市民の美的素養を養成するデザイン教育を展開する絶好の機会であった。大量生産品の主要な享受者である「労働者」に向けて発せられたペヴスナーの産業デザイン論には、「モダン・デザインの時代」を同時代のイギリス社会全体を対象とした芸術教育のもっとも有効な機会として捉え、モダン・デザインの製品、とりわけ大量生産品に階級的制約を超えた一大社会運動としての美的素養の養成と社会改良の実現の鍵を発見しようとする意気込みを読み取ることができる。

5) 結びにかえて

ペヴスナーは、政治的にも、芸術文化史家としての研究姿勢においても、労働党的価値規範の持ち主であった。彼は、一般大衆の住居や大量生産品の持つ芸術的価値を、貴族のカントリー・ハウスや新古典主義芸術の大家の手による絵画と比して低く扱うことはせず、等しく真剣な考察を加えた。

青年期にエディンバラ大学の教授職への就任を熱望し、後にケンブリッジ、オックスフォード両大学のスレード記念美術史講座教授を歴任したペヴスナーは、確かに華麗な経歴を志向する一面を有していた。しかしその一方で、彼が常に関心を注いでいたのは、一般大衆の日常生活を支える事物のもつ芸術性であった。彼は、そうした事物に社会での実際的な変化をもたらし得る「芸術の力」を見出していたのである。こうした姿勢において、芸術文化史家としてのペヴスナーの学術的関心は、彼の「社会改良家」としての意思と矛盾なく結びつくことになった。そのことは、彼が正教授として25年にわたって芸術文化を講じた場が、上述の伝統大学のいずれにおいてでもなく、労働者のための夜間学校に由来するロンドン大学パークベック校

であったことにも表れていると言えよう。

(注)

1. Susie Harries, *Nikolaus Pevsner: The Life*, London: Chatto & Windus, 2011, p. 47 および Stephen Games, *Pevsner – The Early Life: Germany and Art*, London: Continuum, 2011, pp. 82-83.
2. Nikolaus Pevsner, *An Outline of European Architecture*, Harmondsworth: Penguin Books, 1942, p. 34.
3. *Ibid.*, p. 43.
4. Cf. Nikolaus Pevsner, *Architecture as a Humane Art: The 1972 Raoul Wallenberg Lecture*, Ann Arbor, MI: College of Architecture and Design, The University of Michigan, 1972, p. 35.
5. Nikolaus Pevsner, 'Roehampton: LCC Housing and the Picturesque Tradition', *The Architectural Review*, July 1959, pp. 21-35.
6. Nikolaus Pevsner, 'Philosophy of Furnishing', *The Architectural Review*, July 1965, pp. 9-12.
7. Nikolaus Pevsner, 'Thoughts on Industrial Design', *The Highway: The Journal of the Workers' Educational Association*, vol. 27, March 1946, p. 70.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 近藤存志 'Nikolaus Pevsner: Talking Industrial Design to the Workers' Educational Association', 『フェリス女学院大学文学部紀要』53号、2017年、pp. 47-65. 査読無
2. 近藤存志 「ドレスデンのペヴスナー キリスト教信仰、表現主義、そして20世紀芸術に対する美術史的関心」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』2号(フェリス女学院大学キリスト教研究所)、2017年、pp. 51-70. 査読無
3. Ariyuki Kondo, 'Talking Homes: Pevsner's patient campaign for social reformation', *Conference Proceeding: House and Home '17/ International Interdisciplinary Architecture and urban Studies Conference*, Istanbul: DAKAM Eastern Mediterranean Academic Research Center. 2017, pp. 33-41. 査読無
4. Ariyuki Kondo, 'To Design Well is a "Moral Duty": Nikolaus Pevsner's Modern-Medievalist Appeal', *Aesthetics* (『国際版 美学』), No. 20 (2015), pp. 75-88. 査読有 (The Japanese Society for Aesthetics 美学会)(2017年公開)
http://www.bigakukai.jp/aesthetics_online/

aesthetics_20/text20/text20_kondoariyuki.pdf

5. Ariyuki Kondo, 'Anomy in Design: Sir Nikolaus Pevsner's Admonition to "Democratic" Society', Wendy Siuyi Wong, et al. eds., *Making Trans/National Contemporary Design History*, São Paulo: Blucher, 2016, pp. 223-227. 査読有

6. 近藤存志 'Quiet, Humane and "Anonymous": Pevsner's art-historical response to wartime', フェリス女学院大学文学部 『フェリス女学院大学文学部紀要』 51号、2016年、pp. 57-71. 査読無

〔学会発表〕(計8件)

1. Ariyuki Kondo, 'Nikolaus Pevsner's Vision as an Editor: *The Architectural Review* and twentieth-century democratisation of architecture', 'Editing the Twentieth Century' Conference, September 2017.

2. 近藤存志 'Nikolaus Pevsner: Talking Industrial Design to the Workers' Educational Association', 意匠学会第59回大会、2017年8月。

3. Ariyuki Kondo, 'Nikolaus Pevsner's "Neo-Victorianism": What a Modernist-Functionalist saw in Victorian Architecture', 12th International Conference on the Arts in Society, June 2017.

4. Ariyuki Kondo, 'Talking Homes: A Pevsner's patient campaign for social reformation', HOUSE & HOME '17 / International Interdisciplinary Architecture and Urban Studies Conference (DAKAM: Eastern Mediterranean Academic Research Center), March 2017.

5. Ariyuki Kondo, 'Anomy in Design: Sir Nikolaus Pevsner's Admonition to "Democratic" Society', ICDHS 2016 Taipei: The International Conference on Design History and Design Studies, November 2016.

6. Ariyuki Kondo, 'Die Brücke between Time and Design: Young Pevsner's Expressionist Search for Timeless Criteria in Good Design', 11th International Conference on the Arts in Society, August 2016.

7. 近藤存志 「ドレスデンのペヴスナー 表現主義絵画におけるヨーロッパ中世主義の精神」, 意匠学会第58回大会、2016年7月。

8. Ariyuki Kondo, 'To Design Well is a "Moral Duty": Nikolaus Pevsner's Modern-Medievalist Appraisal of Design', Design History Society Annual Conference, September 2015.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 存志 (KONDO, Ariyuki)
フェリス女学院大学・文学部・教授
研究者番号: 00323288